

病状は次第に重くなっていた。眼は疲れ、頭は朦朧とする。耳は遠くなる。友が差しだした塩汁さえ飲む気が出ない。幻のように故郷の思いがはせる。知らずして深い眠りにはいった。どのくらいの時が過ぎたか、何か聞こえてくる。

「二丁あがり」

といった。その声に気がついた。眼を開くと二人の衛生兵がいる。「大丈夫か」と自分に向かっていった。近くに寝ていた友はいない。死んだのだと気づく。一緒に枕を並べていた二人の友も故郷に帰った。私は昨夜故郷に帰りふたたびもどったのだ。

いらい、日一日と気力もどってきた。そんななかで終戦の報を知った。米軍機が到来し悠々として飛び、なにか大量にばらまいて行く。一片の紙片、

「日本軍の皆さん戦争は終わりました。故国の家族と会える日が参ります。長い間ご苦労様でした。お体を大切にしてください」

と昨日までのにくしみも、読んだ瞬間旧友の言葉のように嬉しく涙が止まらなかつた。

戦いの惨めさ、悲哀は多く、筆舌に盡くせない。

南海に戦つ

福島県 長峯 利夫

昭和十八年五月一日、三重県鈴鹿において我々は一個中隊の編成を完了した。部隊は五月下旬宇品港を出港、一路ニューブリテン島のラバウル港にむかい、平安な航海のち六月八日ラバウル港に入港した。六月三十日に前着の一個中隊をあわせて部隊の編成をおえ第四航空軍の第六飛行師団の指揮下にはいった。

ときに米軍は反攻の勢いをぞうちょうし、レンドバナッソウに上陸をした日であった。飛行師団も四月よりその主力はニューギニアに転進しつつあったので、我が中隊も各飛行場の整備の進展にともない、ニューギニアのウエワク、ハンサ、アレキシス、レンゴ（後にハイン）に展開することになった。

八月下旬ラバウル港出港、ウエワクに転進、任務につ

くこととなり、パラオ港に一時上陸と同時に一個分隊がパラオ群島の南部にあるペリリウ島に着任、同島の飛行場で勤務することとなった。

我々の任務は飛行場において航空気象、気象情報の報告並びに航空気象図の作成により航空機の飛行の安全を目的とし、ときには敵の航空気象の暗号解読によ敵地上空の天気の報告であった。

とくに編隊による飛行は気象のいかんによって作戦、燃料の消耗等には重大影響を与えることになるので、我々の任務は地味ではあるが大変な任務であった。私はペリリウ島派遣の一人であった。

ペリリウ島在任中、とつぜん、海軍の一式陸攻が二十四機飛来した。海軍の隊長は少佐だったが、これからすぐにトラック島に飛ぶというのである。今マキン島とタラワ島が米軍の攻撃を受けておりこれからすぐその応援に行くとのことである。この島には海軍の基地とはいいながら海軍の兵隊は少なく、飛行場には何人もいないので、我々十一人が必死になって燃料の補給にがんばった。だが我々の隊長の気象判断によると途中天候が非常

に悪く、飛行はむずかしいだろうとのことであった。だが一刻を争うときだからと二十四機はとび立った。我々も帽子を振って彼等の奮闘を祈ったのだったが約二時間後ふたたび全機この飛行場に引き返して来た。やはり途中の気象が悪くトラック行きを断念したのである。それからがまた燃料補給の協力で夜半までかかってやっと終わった頃は全身ヘトヘトであった。

翌朝早くに全機飛び立って行ったが、気象の大きさをつくづく感じた一件であった。彼等に見れば味方が攻撃されているのだから、一時も早く飛んで行きたいのは当然のことであったかも知れないが、天候には勝てなかったのである。

後日、マキン、タラワの両島はついに玉砕したことを聞いた。あの二十四機はどうなったのだろうと、皆んなで話しあったのはいうまでもない。

このペリリウ島は長さ約八キロ、幅最大のところで三キロ程度で飛行場のほかは細長い島で誠に小さな島である。三個所に部落があり、カナカ族が住み当時日本語の学校があつて島民はそこで勉強をしていた。もちろん日

本語で話ししていたので不自由はなかった。

やがて米軍の反攻ははげしさをくわえ、ニューブリテン島とニューギニア島の間のダンピール海峡は米軍制圧下にあった。六月三十日にはソロモン群島のレンドバ島ニューギニアのサラモアに上陸、九月三日にはポポイに上陸、そして十二月十五日にニューブリテン島のマーカー岬に上陸、同じ二十六日には同島のツルブに上陸してダンピール海峡はまったくの米軍の制圧下になった。

この頃からペリリウ島にも海軍の飛行機の飛来が多くなり、我々の仕事もいそがしくなってきた。

十九年一月二日にはニューギニアのダンビに上陸、次々と米軍は北上し、西進に転じた。我々も一時中隊本部(ウエワク)に転進せよとの命令で、一月末ウエワクに到着、中隊に合流したが、再度ペリリウ島に着任することとなり、一〇〇式重爆を四航軍で使用せよとのことで四人これに乗機、ニューギニアのホーランジアで一泊、翌朝二月三日ペリリウ島にとんだ。

戦況はますます激化、二月十七日はトラック島が敵機動部隊の大空襲を受け甚大な打撃を受けた。この空襲の

四、五日前と思うがパラオ港に戦艦「武蔵」が入港した。たった巡洋艦一隻が同行し、トラック島からシンガポール方面に向かうとのことであった。

二月二十九日、米軍はアドミラルティ諸島に上陸し、つぎの上陸地点はニューギニアのウエワクではなからうかと思われた。ニューギニアの敵の空襲は日に日にその回数を増し、我が第四航軍は三月二十五日第二方面軍の隷下にはいりホーランジアに移動し、ラバウルより西へ西へと移動せざるをえなくなった。

また四月十五日には南方軍直轄となり本隊はホーランジアを立ててセレベス島のメナドに後退したのだった。

そのあとを追うようにして米機動部隊は二十一日五百機(六百機のホーランジア空襲をおこない、二十二日に上陸を開始した。ウエワク上陸と思われたのがその先のホーランジアに上陸したのであった。当時、同所在部隊は航空関係部隊七千人、海軍一千人で歩兵は二百人に過ぎなかった。我々ペリリウ島の四人も海軍の航空隊に協力、忙しい日々であったが、当時同島には陸軍の航空機は飛来することはほとんどなく、海軍の常駐機の零戦と

一式陸攻で、ときには「彗星」艦爆がみえるだけであつた。

戦況がダンピール海峡よりニューギニア北部海岸を西にそってはげしくなるにつれ、海軍の航空機の発着もひんばんになって来た。「虎」「象」といった名前の零戦や一式陸攻がくるようになった。彼等は「大東亜決戦隊」と称して、きたるべき日をまえに意気すこぶるさかんであつた。ホーランジャに敵上陸と聞いて、つぎは当然飛行基地としてのこのペリリウ島、または米軍進路上のニューギニア西北部およびハルマヘラ島が攻撃されることは十分予知されていた。

二十二日ホーランジャ上陸を援護し終わった米軍機動部隊（空母十隻を主力）は、ついに我々の駐屯しているペリリウ島を攻撃して来た。四月二十九日の早朝であつた。空襲警報で目をさますと、海軍の一式陸攻がブンブン飛び立つのがみえた。零戦も全機とび立ったようだった。米機動部隊は近くに来ていろいろ、ほどなく米軍の艦載機がみえてきた。ズングリ胴のグラマンだ、飛行場目がけて機銃の火を吹くのがよくみえる。味方の対空

砲火の曳光弾が敵機近く尾を引いて発射されるが、なかなか命中しない。敵機の数はまだ多い。島の上空は敵機だらけである。島の住民たちは島の中央の山中の洞窟に避難している。武器のない我々は手出しの仕様もない。近くの井戸のある洞窟に入り敵機を見上げるばかりであつた。いっときも休まないしつような攻撃である。数を頼りの反復攻撃は一日中続いたが、爆撃機の攻撃がみられないのはどうしたことだろう。パラオ本島やコロール市街の攻撃に向かったためだろうか。これはあとから感づいたことであつたが、ホーランジャ上陸援護のために爆弾は大方消費したのかとも思われるが、それにしては爆弾による被害のないのは驚いた。

味方の飛行機は飛び立つてから約二時間近くになって帰ってくるのがみえた。しかし敵機が上空にいるままだななかである。もう燃料切れで着陸する以外になく、着陸するや否や敵機の攻撃で燃える。目をおおいたくなる気持ちと口惜しさで涙が出る。一式陸攻は一機も帰って来なかった。敵機動部隊の攻撃に向かい、十隻の空母の敵機、或いは対空砲火のためにさんげしたのは間違いない

のだ。夕方近くになり敵機の姿もみえなくなった。案外飛行場の滑走路には被害はないのだ。兵舎は穴だらけだが、建物の焼失がないのが不思議である。その時爆音が聞こえて来た。スワまた空襲かと思つて緊張したが、見上げる上空にはあのなつかしい日の丸が翼下に見える友軍機である。大喜びで両手を挙げて万歳する。一機また一機と着陸する。海軍の「彗星」艦爆である。あの特徴のある水冷エンジンの金属性のキーンという音がなとなつかしいことか。零戦の姿もみえる、約三十機ぐらゐあつたと思う。だが数としてはまことに少ないもつと来れないものだろうかと一瞬思つたものである。

敵機動部隊は空母十隻である。機数は少なくとも六百〜七百機はあると思われる。あとでわかつたことであるがほかに戦艦数隻、巡洋艦、それに付随する小艦艇、輸送船も含まれる大艦爆であつたらしい。我が軍の攻撃で戦果は戦艦一隻炎上、一艦に大損害を与えたとのこと。

大空一杯のある敵機のなかでよく敵艦隊に近づけたものであると感心せざるをえない。着陸した友軍機はサイパン島からの応援機であつた。明日にそなえて燃料の補

給、爆弾の搭載等夜にはいるまでおこなわれた。悪夢のような一日は終わり、眠りについたのは夜半過ぎてであつた。フツとまた爆音に目をさます友軍機が飛び立っているのだ。キーンという音は「彗星」艦爆に間違いのない。零戦も飛び立つ。明けて今日は四月三十日、二日目の戦いが始まつたのである。二日目も敵機動部隊はこのパラオ群島近海にいたので。夜が明ける。ふたたび敵機の来襲となる。我が軍には高射砲は一門もなかつた。大空一杯に飛び廻るのは敵機ばかりで、そのなかにわずかの友軍機が戦っている。白煙を引いて海上に落下、水しぶきをあげる友軍機をみるとどうしようもない口惜しさで涙も出なくなる。一日中敵機の攻撃を受けるばかりであつた。そして滑走路を破壊されないのでをみて、敵機動部隊の実態を知らない我々は上陸するのではないかと気にしたが、揚陸部隊が同行してないので上陸のけねんはなかつたのである。

上空では編隊をくんで北上する敵の飛行機がみえる。パラオ方面に向かうのだろう。昨日同様帰還する味方の飛行機はみえない。全機この南海上空でさんげしたので

ろう。今日も一日中機銃による攻撃は夕日の落ちるまで続いた。あのグラマンFの姿は今でも忘れられない。

そして敵機動部隊の去ったあと、気の抜けたような日となったが、いよいよ敵攻撃の目標となったこのペリリウ島は本格的な前線防衛基地となり、六月にはいつて中川大佐指揮する水戸の部隊が上陸して来た。我々は五月八日付でハルマヘラ島転進を命ぜられ船便を待つ状態であったが、六月下旬海軍の駆逐艦「帆風」に便乗を許されてハルマヘラ島のワシレに向かった。陸軍の兵隊が駆逐艦便乗とは異例のことであったが海軍への我々の協力を認めた海軍の処置であった。

七月初旬ハルマヘラ島ワシレに到着、飛行場勤務となる。ここには陸軍の飛行機が主で、一式戦の「隼」、三式戦の「飛燕」の姿もみえた。ドイツの名機メッサーシュミットとそっくりな「飛燕」は水冷エンジンを備えた機であった。九七重爆は中国戦線では活躍したがもう一〇〇式重爆の「呑竜」にかわりその姿はみられなかった。海軍の零戦も二十一型から二十二型そして新鋭の五十二型に変わっていた。ここでは一式陸攻の機影はなく、珍

しい「銀河」の姿をみる事が出来た。双発のスマートな姿だが、八百キロの爆弾または六百キロ魚雷も積むことの出来る機種であった。双発戦闘機の「月光」の姿もみえた。この機は時速六百キロをこえる当時最高速度といわれた新鋭機でもあった。

米軍の飛行機もコンソリテーターB 24重爆の空襲はたびたびであったし、ここでは陸軍機が多くロッキードP 38、カーチスのP 40が多く見られた。ときどきイギリスのスーパーマリンスピットファイアーがやって来た。とくに珍しかったのはイギリスの重爆ショートスターリングにお目にかかったことであった。ただの一度であったが、爆撃もせず上空を通過した。

連日のように敵味方の爆音を聞きながらの忙しい勤務であった。最前線での新鋭戦闘機の出現を期待しながら待ったが、略号キ八四といわれた時速六百キロ以上の「疾風」や「電電」「紫電」等の戦闘機はみることは出来なかった。夜戦の双発復座戦闘機の「屠竜」は三七ミリの機関砲をそなえ、B 29に対して本土で活躍したことはなどはあとにわかったことであった。あの有名なポーン

グ B 17 は製作中止で B 29 の増産態勢にはいつていたころなので一機もみえなかった。

こうしたうちに、米軍はニューギニアのワクデに五月十七日に上陸した。この敵に対して、陸海の空軍は艦隊決戦を期する「あ号作戦」の空襲部隊（陸、海、計一一機）がダバオよりハルマヘラ地区に集中していたのであった。これにより敵各地に攻撃をくわえていたのだが、そのたびごとに我が方の損害は日に日に多くなつて行った。

いよいよビヤク島に米軍が上陸したのちは当然、我々のいたハルマヘラであることは間違ひなかった。ハルマヘラ島からの敵のビヤク島飛行場の攻撃は続けられたが、また敵の攻撃も日ましにはげしさをくわえてきた。そして九月十五日早朝より空襲警報である。小型機がなんとかずの多いことかと思つたら情報がいって敵艦船約百隻がハルマヘラ島に接近中とのこと。いよいよ上陸かと覚悟を決める。だがなかなか敵船団は見えない。敵はハルマヘラ島のすぐ目の前のモロタイ島に上陸を開始したのであった。

モロタイ島には第二遊撃隊と称する高砂族青年の四個中隊が配置されていただけである。この米軍に対してほとんど連夜攻撃を実施したが、敵も我方のメナド、ケンダリー、そして自分達のハルマヘラ地区に対する飛行場攻撃を反復し敵味方の間に飛行場の破壊、修復の競争が繰り返された。しかし敵のモロタイ島の飛行場は二十四日ごろからすでに使用を開始しており、十月中旬頃には百機、下旬には二百機の機影がみとめられるようになった。

ホーランジャ以西の敵空軍機は一千機に達するものと思われた。これに対して、我方も連日に攻撃をおこなつたが、昼間はひっきりなしの敵の攻撃で夜間にはいつてのみ攻撃せざるをえない状態であった。夕方になり、セレベス方面よりハルマヘラのワシレ飛行場に飛来、夜になり目のまえのモロタイの敵飛行場を攻撃するのである。敵上空に達すれば地上砲火が花火のように打上げられるのがよくみえる。

攻撃隊内でとくに第十二戦隊の活躍が目立っていた。十二月までの戦果は攻撃延数は百七十二機、内成功は百

二十五機で敵地炎上四十か所、炎上機十五機、大中破百二十八機であった。自爆四機、未帰還七機の犠牲もあつたのである。其の間ハルマヘラ来襲の敵機は十九年の十二月までに一千三百五十機に達した。

通信関係はモロタイ敵上陸後となりの島セレベス島の連絡が途絶し、ただひとつ我々の隊のみが連絡が取れていたので航空作戦上まことに重大な立場にあつた。したがって各部隊の電報は我々を通じて発信、受信となり忙しきは倍増した。通信もムラ(普通)よりもウナ(緊急)またはウナサキ(作戦緊急)が多くなり、時にはライ(軍機電報)もあつて事態の緊急度がヒシヒシと身にしみるのであつた。

そして十月二十日にはフィリピン群島のレイテ島に上陸と飛び石づたいに日本本土攻撃にとなつたのである。

ここでさきのペリリウ島であるが、はからずも九月十五日モロタイ島上陸と同日に、ここにも米軍は上陸したのであつた。米軍第一海兵師団の第一波は西海岸に上陸を開始した。ここはサンゴ礁の海で我々がよく余暇をみて魚取りなどして遊んだきれいな海岸であつたが、戦車

をともなつて上陸、飛行場西南を攻撃、南北に我が軍は分断され、南にわかれた隊はついに十八日に島南端に孤立玉碎した。その後、米軍は頑強な我が軍に対して隣の島アングウル上陸の軍をさらにペリリウ島に向けて来て、彼等の戦闘は激烈をきわめた。なお米軍は島の北部平地にも進出、我が軍は中央の高地洞窟に後退することとなつた。この高地はいたるところに無数の洞窟があり海軍の火薬庫もこの洞窟のなかにあつた。劣勢な我が軍の応援をとパラオ本島まで島づたいに海を泳いで連絡をしたことは有名な話であるが、増援部隊一個大隊が二十三日に到着したが全滅した。十月二日であつた。

なお抵抗を続けた我が軍は島中央のわずかな山地洞窟に完全に包囲されたのは九月二十四日であつた。敵は火炎装甲車を出動させ、我が軍を攻撃、連日死闘を続けていた。十月一日には完全な包囲となり、六日には切り込み隊が飛行場夜襲を敢行するなど息づまる戦闘が繰り広げられた。十月十二日全兵力は中川連隊長以下一千百五十人となり、十月末日には軽傷を含め約五百人となる。水、弾薬不足のなか、切り込み隊の夜襲で抵抗したが米

軍はホースでガソリンを洞窟内に注入、これに火を付けるという攻撃に出た。

陣地はますますせばまり、彼我の至近距離は二十メートル接近した戦いとなる。一月三日には完全な米軍包囲のなかととなり、ついに十二日米軍の総攻撃が開始され、二十三日には戦車を先頭に包囲をせばめ、二十四日に火炎攻撃を集中されたのを最後に五十五人の夜襲を敢行、中川中佐はパラオ島に最後の「サクラ、サクラ」を打電、二十五日に玉砕した。

あの平和な島はなにもないただの島となってしまうのだった。今は部落がただ一個所にあるだけで、飛行場の影も形もない大きなコンクリートの水槽に、だきかかえるほどの大木がこれをまたぐように生えているのが悲しいと、現地に足を踏み入れた私の戦友がいった。一つの公学校の校門の片方だけがポツンと残っているだけで、ジャングル化してしまったとのことである。

転進命令がなくて、自分もここにいたら間違いなく戦死者の一員となっていたのだろう。未だに南海の戦火に依る傷跡は消えない。